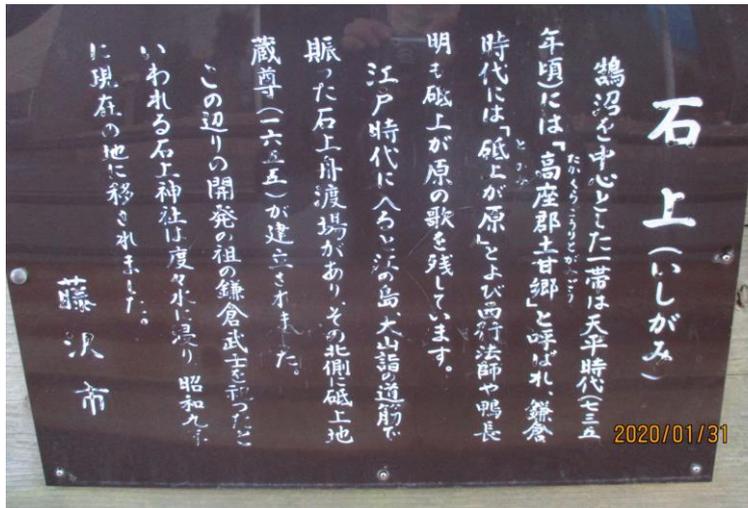


藤沢駅南口下車、小田急百貨店横のファミリー通りは江ノ島道である。商店街を抜けと砥上公園という小公園があり、杉山検校が建てた江ノ島道道標、並んで藤沢市が建てた案内板がある。



天平時代（735年頃）には「高座郡土甘郡」と呼ばれ、鎌倉時代には「砥上が原（とがみがはら）」と呼び西行法師や鴨長明も砥上が原の歌を残している、という。西行については、1186年（文治2年）、鎌倉に旅する途中砥上が原を通り2首残している。「芝まとふ葛のしげみに妻こめて砥上が原に牡鹿鳴く里」「こころなき身にもあはれ知られけり鴨立沢の秋の夕暮れ」、いずれも有名な歌で高一の国語甲にあったので覚えている人も多かろう。西行が歩いた道についてはこのコーナー（H24年3月~5月）で書いた。

鴨長明（吉田兼好）は、「方丈記」の著者として知られ、国語乙必修であった。書き出しの「行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらずよどみに浮かぶうたかたはかつ消えかつうかびて久しくとどまりたるものなし。世の中にある人とすみかとまたかくのごとし」、国語の教師はこの下りを暗記しろ、今はその意味が分からなくとも、きっと分かるときがやって来るといった。美空ひばりの「川の流れのように」と同様、ひばりと同世代の私に今は分かる。

さて、鴨長明は何のためにやって来たか。どんなルートを通り砥上が原にやって来たのか、どんな歌を残したのか知りたくなる。「新選相模風土記稿」に鴨長明は1211年（建暦元年）、下向し、將軍源実朝と会見する前、「八松の八千代の陰におもなれてとがみが原に色も替らし」「浦近き砥上ヶ原に駒止めて固瀬の川の潮干をぞ待つ」と二句残したとあった。一時、鴨長明の作ともされた「海道記」は作者不詳であるが、作者は貞應2年（1223）4月4日に京都を出立して、4月17日に鎌倉に着いた。作者はこの文の中で、「相模河ヲ亘レバ、懐嶋ニ入りテ砥上ノ原ニ出ツ。南ノ浦ヲ見遣レハ、波ノ綾織ハヘテ白キ、色ヲ濯フ、北ノ原ヲ望ハ草ノ緑染ナシテ浅黄ヲサラセリ。中ニ八松ト云所アリ。……八松ノ千世フル陰ニ思ナレトカミ原ニ色モカハラス。……固瀬川ヲ渡リテ江尻ノ海汀ヲ過レハ、江ノ中ニ一峯ノ孤山アリ。……」

相模河を渡ったところが、砥上ノ原、中に八松という所あり。とあり砥上ノ原の範囲が広いことが分かり、片瀬川を渡って江尻（海のふち）を通して鎌倉へ行ったものと解されている。

定説では砥上ノ原とは広い意味で片瀬川から相模川までの海浜の原野を指し、狭い意味では片瀬川から引地川までの地域、現在の鶴沼の辺りを言った。八松原とは広い意味の砥上ヶ原の一部の名称で、引地川から相模川までの原野を指し、狭い意味の砥上ヶ原の西に続き現在の辻堂・茅ヶ崎。小和田がこれに相当するとさ

れた。(湯山学 湘南物語上)

辻堂の八松(やまつ)の名は八松神社(東町町内会館の隣)八松小学校に残る。鴨長明は八松から海岸に出て海べりを歩き引地川、片瀬川の河口を通過して鎌倉へ向かったと解されている。



辻堂 八松神社

昨年、6月、秋田に旅した際、座席にJR東のPR誌「トランヴェール」に沢木耕太郎のエッセイがあった。『たまたま数日前に鴨長明の「方丈記」の現代語訳を読んでいたが、その訳者の解説に、私が初めて知ることが記されて驚かされた。なんと鴨長明は実朝の和歌の教師になるべく京都から鎌倉を訪れたことがあるというのだ。しかし何らかの理由で採用されず、傷心の鴨長明は空しく京都に帰ることになった。実際、鴨長明は「方丈記：中でも「おのずから短き運を悟りぬ」と自分の不運を嘆いている箇所があった。だが、実朝の和歌の教師になれていたら、日本文学史上に燦然と輝く名エッセイの「方丈記」は書けなかったかもしれないのだ。それがまさに運命のいたづら、歴史の不思議とも言うべきことだろう」と述べている。



鴨長明(吉田兼好)は源実朝の和歌の教師になるべく、鎌倉へ行ったが採用されず、空しく京へ戻ったのであった。以前、私が住んでいた横浜市栄区にいたち川という川があり、川辺に吉田兼好が残した歌が紹介されている。いたち川は出で立ち川が訛ったもので、鎌倉道の出発点でもあった。以前、私が住んでいた栄区にいたち川という川があり、川辺「いかにわが **た**ちにしひより **ち**りのきて **か**ぜだにねやを **は**らはざるらん」(私が旅に出てから大分日がたったけれど、私の寝屋にもさぞかしほこりが積もっているだろうな、風が吹き払ってくれることもないだだろ)。

京を出て実朝から和歌の教師の声がかかるのを待ちつつ都の家が気になっての歌であろうか。

参考文献など：「湘南物語Ⅱ(上)」湯山学 「新編相模風土記稿」 「東関紀行・海道記」玉井幸助校訂 「藤沢の地名」日本地名研究所編 栄区HP